

貴重な出会いや経験を 日常に置き換えて考えてほしい。 「で、自分は何をすべきか」と

Motoyuki Takahashi

高橋基之

実践女子学園中学校高校 校長

「実践力」を身に付けるための探究教育、仲間と協働しつつも、最後は「個」に戻す

本校は、女性の社会的自立を目指し、校祖下田歌子によって1899年に創立されました。校歌の一節に「にほへやしまの外までも」とあるように、当時から国の外を意識した教育を行い、それが今のグローバル教育につながっています。

校祖が校名を「実践」としたのは、女性の社会貢献を唱え、実践と責任を重んじたから。これも、社会で求められる資質・能力の育成を目指す、今日の教育改革につながっていると感じています。

その「実践力」を身に付けるため、力を入れているのが探究教育、グローバル教育、感性表現教育。なかでも探究を「人と協働して思索を深める取り組み」と捉え、コミュニケーションを主体とした活動を重視しています。人には得手不得手があるもの。得意な部分を出し合い、不得意なところを補う。そうした課題解決型探究の機会を多く用意しています。例えば、昨年の総合学習プロジェクトでは、「区長になり、2020年に渋谷を訪れる外国人がハッピーになってもらうには」という課題に取り組みました。優秀チームは実際に区長の前でプレゼンし、前向きな講評も頂きながら学びを深めました。その他、企業が提示した課題に取り組むクエストエデュケーション

や模擬国連、高大連携によるボランティアなども実施。その多くが仲間と協働して行うプログラムです。ただし、「個」に戻しながら考えることも意識してもらっています。何事も、最後は自分で考え、決めなくてはならないからです。同様に、さまざまな行事で本物に出会ったり、人の熱い思いに触れたりしたとき、「貴重な経験をした」だけで終えてはいけません。それを自分の日常に置き換えて考えてみる。「で、自分は何をすべきか」と問うことが重要です。

一人の生徒が成長しているという事は、周囲も一緒に成長していることなんです

私は長く公立の共学校で過ごしたため、赴任直後は学校文化の違いも感じました。安全に対する配慮もそうだし、生徒の質問や相談に実に丁寧に対応する点もそう。成人の日には第一回目の同窓会となる「祝成人の会」が講堂で開催されるのですが、出席率は9割以上。卒業生同士はもちろん、教員との絆の強さを感じます。人事異動がある公立校との大きな違いです。

一方で、人事が硬直する可能性も秘めているわけで、教職員は常にキャリアに応じて「今の自分の役割は何か」を意識してほしいと思います。トップダウンだけでは人は動かないため、若手の声にも耳を傾けながら、コミュニケーションを密にしていくつもりです。校長室のドアをオープンにしているのもそのため。加えて、生徒の様子を常に目に入れておきたいからです。一人の生徒の変化でも周りに伝播するもの。自分が成長すると友達も成長し、友達が成長すると自分が成長するという意識が大切です。保護者にも、周りの生徒の成長は、自分の子の成長につながることを伝えていきます。以前、社会教育活動の中で、ある方から「初めて他人の子の成長を見て嬉しくなりました」と言われ、私も嬉しくなりました。

たかはし・もとゆき

1955年生まれ。筑波大学第一学群自然科学類卒業。大学では混声合唱団を創設。卒論のテーマは河川地形。好きな音楽や地理をキャリアに活かすとともに、学問の面白さを伝えようと教職を志望。東京都立東大和高校、田無高校で計18年勤務。その後、東京都教育庁指導主事、豊島高校(定時制)副校長、東京都教育庁副参事、豊島区立西巣鴨中学校校長、目黒高校校長などを歴任し、都の教育改革に従事するとともに、多様な校種の管理職として学校経営に邁進。2014年には全国高等学校校長協会会長、中教審教育課程部会臨時委員も務める。定年退職後、都教職員研修センターで若手教員を指導。秀明大学教授として教員養成にも携わる。2017年4月より現職。全国地理教育研究会会長。東京都高等学校音楽教育研究会副会長も務める。趣味は合唱、アウトドアスポーツ。